2030戦記

津木山

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２０３０年　《特殊類》との戦いに均衡が保っされてた

ある幹部達はある過去を持ちそれに向けて動いていた

そんな時の流れを感じなら仲間達と戦い、使命を感じながら生きて行く

※初作品であるためまだまだ不慣れな所が有ります

温かい目でお願いします

質問、指摘等があれば大歓迎です

※１０月２　原作欄を色々にさせてもらいました

目次

第壱話 ―― 1
第弐話 ―― 11
第参話 ―― 18
第肆話 ―― 24
第伍話 ―― 31
第陸話／第漆話 ―― 37
第捌話／第玖話 ―― 46
第拾話／第壱拾弐話 ―― 52
第壱拾参話 ―― 66
第壱拾肆話 ―― 69
第壱拾伍話 ―― 74
第一版設定資料集&陸点伍話 ―― 81
第壱拾陸話 ―― 97
第壱拾玖話&弐拾話 合併話 ―― 103
第弐拾玖話&参拾話 合併話 ―― 110
第壱拾漆話 ―― 119
第壱拾捌話 ―― 122

第壱話

《日本国、太平洋沖、某所　前年７月２９日》

「不審船発見、ＩＦＦ，かけています、距離ゴウロクＭＩＬ　方位９時」

「おい電測員、数はどうした報告しろ、それと艦橋へ連絡、いいな」

「はっ」

「すみません、数はロクです、ＩＦＦ応答なし、敵艦判定いたします」

「戦闘配置を引くいいな」

「はっ」

　艦橋

『対水上戦闘用意』

『なんだって』

「副長、ＣＩＣからの情報は?」

　艦長はカポックを着ながら副長に情報を聞いた

「敵艦ロク、距離ゴウマルＭＩＬ、方位９時、艦種識別不可」

「特殊類艦か?」

副長は厳しいい表情で首を縦に降った。
「そうか、よし敵艦隊に向けて転進する本部及び海保に暗号打電、通信士、いいな」
『はっ』
「私はＣＩＣに行く。副長、いつも通りに艦橋は任せる」
「了解しました」
（何故日本近海に〝特殊〟が現れるんだ？）

ＡＩＣＩＣ
「敵艦隊の様子は？」
「依然、変わらず、距離ゴウゴウまで接近、方位変化なし」
「どうだ敵に変化は？」
「艦長！」
「敬礼はなしだ、それより先程の話を聞きたい、船務長」
「はい、敵艦ゴウゴウまで接近それ以外は変化なしです。付近に艦船は有りません」
「そうか、完全に不意打だな」
「日本近海の出没情報は昨年１２月から一切有りませんでしたから……」
「それより目の前の敵を対象しよう」

「艦長、砲雷長からの進言として主砲は有効射程で撃ちたいです、ミサイルは正直ゆって、、」
「船務長がきめ―」
「―待て船務長、怒るのはやめなさい」
「申し訳ございません」
「よろしい敵艦種識別はまだか？」
「い、いえまだです？震え声？」
「リラックスでいけ、そうか、砲雷長、ここは一つ教えてやる、ミサイルで〝確認〟するいいな」
「え？　撃つのですか、分かりました、対艦ミサイル発射よーい」
「左側で撃つのと」
「発射待って」
「わかりました艦橋指示ですね。」
　艦長が無線機を取る
「艦橋」
『はい副長です』
「対艦ミサイルを撃つ左側へ回頭したいいいな」

『了解』
『敵艦隊、発光確認』
『面舵角度は任せる、艦長』
「ああ分かった面舵のままでいい回避に専念しろいいな」
『分かりました、ミサイルも撃って構いません』
「心強いな。では」
　無線機をおろす
「敵艦発砲確認」
「艦長」
「艦橋には言った右側で撃っていいな」
「わかりました」
「全弾回避した模様」
「攻撃よろしい、ヤレ」
「ＣＩＣ指示の目標、１７攻撃始め～～」
「発射用意、撃て！」
　その時、艦中央で発煙が確認されて、まもなく飛翔体は奥側へ消えた。
「５秒前、スタンバイ、ターゲットサーバイブー」

「敵艦、艦種判明、戦1軽巡2駆逐3です軽巡以上は人型です、先程のミサイルは戦艦にあったた模様、被害判定不明、すみません艦型はわかりません」
「了解、機関長、機関の調子は?」
「まだ行けるぞ、艦長さん」
「速度リミッター解除、フタマルまで行くぞいっきにな」
「まぁこの戦場だったらやむおえないませんからなーわかりました。艦橋と連携します。」
「ソナー室より通信が入っています」
「わかった、繋げろ」
「はい」
『こちらソナー室、味方潜水艦を発見しました。敵艦隊の発見の連絡を受けて急行したそうです。』
「艦長だ、そうか味方潜水艦はなんて言っている?」
『魚雷攻撃を行うそうです』
「連携すると伝えよいいな」
『わかりました』
「その前に、しお型かりゅう型どっちだか教えてくれ、場合によっては近くまで接近して

迎撃に当たりかつ艦型を見て見てもらいたいから」
『りゅう型です』
「わかった、潜水艦にそう伝えてくれ」
『確認ですが☒接近して艦型を確認連携攻撃をせよ☒とですか』
「そゆうことだ」
『わかりましたでは』
「これから本艦は潜水艦と連携攻撃を行う砲雷長、ソナー室とＣ４Ｉ連携が需要だいいな」
「わかりました、自分がソナー室と連絡を取ります」
「わかった、さてと今何マイルだ？」
「はいゴウマルを切りました。」
「船務長、次取るべき行動は何か答えてみろ」
「はい回避行動を取りずつ砲戦距離まで取るべきかと」
「そうだ」
　船務長が無線で艦橋へ伝えた。
「わかりました回避行動を取りずつ接近して下さい。」
『もうしてますよ、接近でいいですね艦長』

「そうゆうことだ」
『わかりました』
　無線機をおろす。
　その時
「敵艦発砲を確認」
「回避は最大にしろいいな機関長」
「はっ」
「潜水艦より連絡、敵艦隊の艦型判明したとのことですＣ４Ｉの情報だと、戦はタ級、軽巡は前のやつはへ級もう後ろはホ級、駆逐に関してはすべてナ級だそうです、なおタ級は大破した模様」
「そうか潜水艦に連絡、陽動でこっちの射程に入りたいから引っ張ってくれ手柄は分け合うとしようとな」
「はい了解しました」
　一時間弱、深海棲艦達から逃げ回り続けて遂に
「本艦、有効射程に入りました。」
「よし潜水艦に連絡、獲物も知りたい」
「獲物は駆逐でいいそうです軽巡はそちらにやると

「わかった、砲戦よーい目標前方へ及びチェイサー優先はへでいいな」
「攻撃よろしヤレ」
「わかりました、右砲戦よーい」
「ＣＩＣの指示、砲術士準備」
「準備よし」
「主砲打ち方始め」
「発砲」
　艦前部の砲が間隔よく撃っていた
　初段が命中するのが艦橋からでも見えた。
『発光確認』
「撃沈するまでヤレいいな」
「はっ」
　・５インチ砲は指示されたどうりに素早く打ちへは回避もできないまま撃沈した。
「へ級撃沈、敵艦隊回避などし始めました、駆逐艦レーダーからロストしました撃沈した模様」
「続いてホへ目標変更」
「主砲打ち方始め」

「発砲」
「艦長、若干斜線が切れてます」
「わかった艦橋へ面舵」
「はっ」
　船が旋回してゆくと砲も発砲
　ホ級はすぐに撃沈した。
　更に取り残した戦艦タ級を主砲で撃沈した。
「付近に艦艇は？」
「ありません」
「潜水艦よりも連絡だいいな」
「戦闘用具収め」
「戦闘用具収め」
　ブゥー、無線のブザーがなった。
「艦長だ、どうした」
『副長です、横より帰投命令が出ています』
「わかった、航海士に母校へ向けるように指示してくれ」
『わかりました』

《本艦はこれより母校へ向けて帰投します》
「しかし今回は何だった？」
「自分は威力偵察ではないかと思います」
「そうかそう見るのが適切かな」
「はい」
「自分は艦橋へ戻るよ」
「わかりました秋山艦長」
艦長はＣＩＣを後にした。
時はフタヒトマルマルを回っていた。

第壱話終

第弐話

《横須賀　船越地区　前年７月３０日》

「接岸よし」

「ふぅ」

「お疲れさまでした」

「あぁそうだな、当直担当以外は上陸させて構わない」

「わかりました、後”提督”が読んでいるそうです。」

「わかった行くと伝えろ」

「はい」

「何やらかしただ？」

横須賀基地、提督室

「秋山一等海佐入ります」

「いいぞ」

「失礼します」

秋山一等は提督に向けて礼をした。

「あぁ座ってくれ」
「はい、、」
「まぁ今回君を呼び出したのもあれだ本題に入るが君に緊急辞令が出るそうだ場所は大湊基地だそうだしかも幕僚長だそうだ」
「えぇ!ちょと待ってください普通はどっかで積ませるのが法則ですが後、緊急辞令て大湊で何かあったんですか?」
「あぁわかっているが、君は護衛隊司令をほぼ3割経験しているからじゃないかな推測だけど、後、緊急辞令についてはどうやら大湊幕僚長が左遷させられるらしい、理由はパワハラで退職がちらほら出て調査してこのざまだったらしい、夏の人事異動では間に合わず、可及的速やかに対象し、左遷させたいという、省の意向だろう、君を守れずにすまんな」
「いいえ別に、では拝命を来たら受け取ります」
(厄介ごとに巻き込まれたな)
「浮かない顔だね、これは僕にも分かるよ、わかった、正式に来たら教える」
「では、話はこれでｉ」
「あぁ待ってくれ今回（特殊類）現れた件について君はどう思う聞かせてくれ」
「船務長と話し合ってきましたがやはり威力偵察なのではないかと思います」

「そうか、ここ最近は懲りずにパナマ周辺に現れたもんだからそっちに攻撃すると思ったからな」
「はい、あそこを潰せばアメリカは面倒のルートを通らざえませんからアメリカは最重要防衛と定めていますから」
「そうだな、しかし今回の偵察行動はきっと何かしら敵はアクションを起こす、その予習だろまぁ僕達の読みが当たっていればの話しだからな」
「まさか!」
「やっぱり引っ掻かていたんだね、まぁ君はまだ成長の余地はあるもっと経験を積みなさい」
「それでは」と秋山は提督に向けて礼を下げた
「失礼しました」
　秋山は室を出た
（何故俺だけ出世コースから外れたんだろう、、
　司令になったのも最近出し、周りは出世してゆくしアイツらも出世したしなぁ、僕は皆から捨てられただろう、、）
　その時、見覚えのある人を見た
「伊山」

「秋山!!久しぶりだな、元気にしてたか?何だったその顔だと何かあったな聞こう」
「Ｔｈｏ　ｏｎｅ?」（誰ですか?）
「ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｆｒｉｅｎｄ　Ｈｅ　ｍａｋｅｓ　ｉｔ　ｊｕｓｔ　ｔｗｏ　ｏｆ　ｕｓ，　ａｎｄ　ｔｈｅ　ｂａｃｋ　ｉｓ　ｇｏｏｄ」
（親友さ、後二人っきりにしたいいいな）
「ｏｋ　Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｇｏｅｓ」（わかりました行くぞ皆）
と言いながら彼の周りの人達がどっかへ消えた。
夕暮れをさす海の方を見ながら彼ら二人は話す
「さてひさびさだな何があった?」
「あぁ異動だって、大湊にな、しかも幕僚長」
「そりゃ大変だな、まぁこっちも太平洋司令になりそうなんだ、まぁあの時のメンバーはまだ君の味方さ」
「今さらりと重要なこと言ったよな太平洋総司令官になるって」
「参謀部の長達が直接、頭を下げたからびっくりしたよ、まぁあの空気は飲めということだからな総司令官は純粋なアメリカ国籍の人又はそのその血をやるべきなのに、と思ったがここ最近妙に陸海空海兵等の上の動きがおかしいと思ったらこれだよまぁうちもそこそこそのクラスに近い内示が出るのではないかと思ったがまさかなて、、」

「まぁおめでとう、後、君の部隊はどうなるだ？確かアメリカの部隊指揮官数が不足が深刻て聞いているが聞いているが」
「直接指揮しても構わんとなるまぁ太平洋軍は海軍がになったがここ最近は後ろめいたからな、そうえば大湊だろ、大湊てパワハラあっただろ」
「あぁこれがあって面倒ごと押し付けられたなと思う」
「これは部下にも言っていることだがパワハラをして、得するのはどっちかわかるか？」
「したほうだろ、しかしわかる問題を何故？」
「正解、更にそこに突っ込むのはさすがだ、本人はいい気持ちになるが部下の気持ちにもなってみろ、ついて行くか？」
「いいえ、それどころか自分は、上へ通報、無理だったら、、」
「そうゆうことだよ現に今の自衛隊入隊率は改善しつつ有るからな」
「パワハラ、金、待遇など改善ですかね、後は〝強行〟政権がやった日中紛争危機、日露紛争危機が国民を目覚めさせましたからね。」
「あぁ中谷政権は正直びっくりしたよだが今思えばあの人は今の日本を考えて行動したんだなて」
「まぁ話は戻るがパワハラ、体罰等をやってみろ部下はついて行かないそれが任務にもついて行かないし部下はいやいやでやりたくないだろうだから僕はパワハラはしない」

「そうだな、僕もパワハラはしないようにしている」
「皆元気にしてるか？」
「あの時のメンバーは元気にしている」
「そうか、〝あの時〟から２０年以上はたっている俺達の手で早くやらないと」
「あぁ〝あの子〟ためにも」
　秋山は首を縦に頷く
「宇佐美総理に明日会う君のことも言うよ」
「うっちゃん元気にしてるかな」
　伊山は笑っいながら「好きなのか」と聞いた
「いいえ」
「そうか、うん？電話だ出るよ」
「いいよ」
「ｍｉｅ」と言いながら伊山は少し距離を取る
　少ししたあと伊山が来て
「ごめん行かないといけないといけなくなった」
「いいよ」
「電話番号とＬＩＮＥ交換してなかったな」

「あぁしようか」
　と電話番号とＬＩＮＥを交換した
「では大湊でも元気でな」
「あぁお前こそ」
　伊山は去った
「よし行くか」と秋山はその場から去って行った。
　その後秋山の大湊への異動辞令が出たのは８月入ってからだった。
　２０３０戦記　第弐話終

第参話

《日本国　大湊基地　３月１５日》

秋山はディスクワークに挑んでいた。

（ここにも随分なれたもんだか……）

（まさか提督自身パワハラを黙殺していたとは恐れいったもんだ）

（更には前がいなくなったら提督自身がするとは思わんかった、金銭確認、自分に優位な情報の即時提出更には上にいい顔をして上にもの覚えを良くしたいだろ自分から見ればバレバレだがな。）

（皆は告発すれば提督からの報復が来るらしいからなまぁ本当らしいしからな）

「はぁ、、、」

秋山は周りを見たちらほら、見たそこそこ空席がある、それは退職による空席であったしかもそこそこ多い、補充が来てもおかしくないが提督に進言しても却下されると言う

事態なのだ上はこのことを把握しているはずだが、、、

「幕僚長、提督がお、お呼びです」

「あぁ分かった行くよ」
　秋山は自分の席を立った
　提督室
「秋山幕僚長、入ります」
「入れをクズめ」
「失礼します」と言うが本心は別だった
「どうされたでしょうか」
「お前どうゆうことだよ、この辞令」
　秋山は分からないとぼけた表情をしたいや実際彼も提督のことが嫌いなのである。
「言ってるんだよこの辞令どうゆうことだよもういい、ゆうこの辞令は提督昇格辞令だよ、上にこび売ったがどうか答えてみろ」
「いいえ別に」と言いながら本心は驚いていたしかしこいつに弱みを出して行けないと行動意識奥底で呼びかけていた。
「ほぉんまだとぼけるのか、言えよ誰かよ言えよ」
「それより提督、自分で作戦をご自分で立てたことあるでしょうかほぼ部下にやらせて自分はは立てないことのくせにしかも模擬戦では提督は自らいい顔して、部下の意見はそうダメ出し作戦を無駄にする、更にはプライバシー侵害をしてダメ出しをしてまでそ

れが部下の教育とかそれが提督の器ですか」
「そう言いながら俺を侮辱するのが」と辞令書を散り破った
「俺はお前の辞令を取り消すことだってできるんだよお前の自衛官人生を今終わらせるするぞいいな」
　とその時、扉が豪快に開く音が来たそれは口論というより侮辱の終了であった
「警備隊だ、石原海将補いるか」
「どうした」
「お前には脅迫罪で逮捕する、更にパワハラをしたそうじゃないか、それで大量の退職者が出ている、上は君を邪魔だっと認識しているんだよ」
「俺はパワハラなんてしていない脅迫もしていない何もしていない」
「連行だ三城」
「わかりましたいつもどうりで、石原さんこっちへ」
　三城は石原海将補の両手をつかもうとしたそしたら石原海将補はすっと引き更に足で三城を妨害しようとしたが三城が一歩引いて更に後ろに周り込み両手を拘束して手錠をかけた
「何をする！」
「逮捕礼状が出ているのでね」と言いながら三城は石原海将補を連れて行ったその際

リーダーと思われる人に「手野さんいつもどうりのところで?」聞いたら「そこで」と言った。

その瞬間僕はくすと笑った。

そしたらさっきまで石原と話してた人が「ちょとお話いいですか?」と聞いて来た

「いいですよまぁ読めてますがね、あの人のことでしょ?」

「鋭い感をお持ちでそうです、今後の調査のためにお願いしますあ、申し遅れましたが手野一等海佐です」

「自分は秋山幕僚長ですまぁ貴方と同じ一等ですけどね、質問に答えますけど情報どうりだと思いますまぁパワハラ、手柄横取り三昧ですけどねまぁそんな感じですかね」

「わかりました、うん?この紙切れはいったい?」

「どうやら提督昇格辞令だそうです場所は聞いてませんが、まぁ自分は落ちこぼれだったですけどね、まぁようやくかなうんどうしました?」

手野は驚いていた。目を大きく開いていた

「うそでしょう」

「見させてもらっていいですか?」

そこにはこう書かれていた

《国防省発令、4月1日付で以下の

舞鶴地方提督兼第３護衛艦隊司令を命ずる
一等海佐　秋山清瀬
国防大臣命　》

「まじですか、うん？まさかと思いますが？」
「はい実は自分、舞鶴所属で上からの命令で大湊の件で来ていまして」
「そうですか、それより上は自分の扱いに付いて聞きたいですか」
「あぁそうでした人事より伝言を預かっていまして臨時代理をしてくれてこの紙にと」
手野が⊠代理を命ずる⊠と書かれ紙があったただ要式がちょとあれなんで多分上でも揉め事もあったかもしれない
受話器がなった
電話だ
秋山はとる
「はい秋山です」
『人事の橋本です、秋山さんお久しぶりですね元気そうで』
「はいはいそうですか、でなんの用ですか」
『さっき警務に渡した紙を見てもらったか、半月ぐらい臨時でお願いします、後君の通知が遅くなったこともお詫びする』

「そうえばそうでしたねまぁいいですよ存分にやりますよ」
『分かったでは切るよじゃな』
「じゃな」
　と電話を切った
「自分は先程、所々関係に連絡を入れたのでで」
　手野は敬礼をした
　秋山も敬礼した
「失礼しました」と手野は去った
　秋山は直ぐに関係機関と連絡を取りながら仕事に取り掛かった。
　２０３０戦記　第参話終

第肆話

《日本国　舞鶴線　車内　4月1日》

『まもなく終点東舞鶴に到着します、特急「まいづる」にご利用者ただきありがとうございましたまたのご利用お待ちしております』

「ついたか」と秋山は見ていた資料を鞄の中にしまい、列車を降りた。

「確か北口を出て、彼かな、出迎えを用意すると上は連絡してたからな」

「初めまして、豊川副官です、本来は宮川幕僚長が自ら出迎えると言いましたがあいにく彼が体調不良で欠勤していまして」

「いいよ、堅苦しいことは車に乗るか」

「はいこちらです」

彼は周囲の景色を見ながら、業務用4号に乗った

彼は今後住む景色を見ながら

「4号とは地方所にも行ったか、まぁ聞かなかったことにしてやるよ、それより宮川幕僚長に付いて聞きたいことがあるいいか?」

「はい」

「彼は体調に弱いのか？」
「はい弱いです、ただ持病等は確認されていません
　実際、筋肉はいい方法ですが、医官いわく、体質じゃないかなて言われてます」
「そうか資料には何も書かれてなかったからな」
「やはりですか」
「何がだ」
「前任に関してはここで言いますが、威圧をかけて、早くここから、出ようと必死でしたからね、これに関しては代々引き継ぎているので」
「そこまで感じていたとは自分も調べたがパワハラ等の噂等は若干〝あったらしい〟と自分も認識知っていたが現実は違っていたか？」
「自分に関しては警務隊の極秘調査である程度分かりましたからね」
「なぜ上に報告しない？」
「実際前任でやったことがあるのですが、告発側が異動になったので、、」
「そうか、嫌な話をしてすまんな、それよりここはいいところだ、昔住んでいたところとなんとな似ている」
「そうですか？、そうえば提督の周りを調べましたが東京都出身だと聞きましたが、、」
「皆のイメージは区でしかも中心さ、自分は多摩地方の都の境橋だよ」

「失礼しました」
　そしてしばらくして
「付きました」
「出迎えが少ない、しょうがないか」
　そこに居たのは、部長達であったそれもそのはず
「提督、とりあえずこの基地現状を話した後、例の件ですが」
「あぁ、とりあえず、基地を見たい」
「分かりました」
　と彼は基地内を見た。
　印象としては、女性隊員が若干多かったがしょうがない
　しかし憎い目で見られた。
　そして彼らは提督室に入った。
　そこには二人の女性がいた
　一人はピンク髪でおさげ風の人と、黒の長髪のヘアバンドをして、眼鏡をかけた人がいた。
「明石二等海佐です」
「大淀二等海佐です」

両者は敬礼をしながら名前を行った。
「よろしく」と言い、彼は椅子に座った
「皆の名前を聞いてなかったな一応資料を読んだが、」
「はい自分は秋川屋作管理部長です階級は一等です」
「私は山口中居一等防衛部長です」
「わしは川越秋久二等経理部長です」
「自分は能山的矢二等監察官です」
「自分は中村藤沢先任伍長です」
「そして自分は先程も言いましたが豊川武蔵二等副官です。その他の物に関しては追々来ます。」
「そうか、あぁ幕僚長のことは知っている、所で技術補給管理官は?」と聞いたら
「すみません、私明石が努めてます」と言い
「そうか」と返事をした。
「それより事態を対処しよう」
「はい」と中村が言い
「昨日１８００、無人機がｅｅｚ内で敵艦隊を発見したと航空より連絡が有り、準備をしていたところ、損失、防衛待機令を出して、２１００、無人機が石川県沖約１５５ＭＩ

Lで発見、行防令を出し、交戦に至りました、敵は煙幕を炊き撤退、被弾艦はゼロです。
現在、第二種防衛配置を引いています」
「上からは?」
「はい上は、日本海を通る艦船に付いては、航行情報を引いています、現在、海上保安庁、航空と連携しています。」
「敵艦隊の陣形は」
「はい、戦艦棲姫、空母オ、駆逐棲姫、重巡ネ、雷巡チ、そしてレ級が確認しました。」
「うむ、これで被弾艦がいなかったのは練度は高いと見ていいだろ、、うんで、こちらの船は?」
「はい、ふゆづき、しらぬいが行きました。」
「そうか、出現したら全艦出港だいいな。次こそ仕留めるいいな」
「分かりました」
「自分は上へ連絡する、退室しても言い」
『分かりました』と全員退室した。
「私も退室します」と大淀も行った。
　秋山は市ヶ谷へ電話をかけた。
「秋山です」

『お久しぶりだね、山口総務部長だ』
「お久しぶりです先生」
『それより、事態のことだが』
「はい、今のところ、防衛待機令を出しています。」
『分かった上へ報告しとく、事態が事態のだけにこっちは敏感なのよ更には敵は未だにパナマ運河を攻撃しない。』
「はいこれはまさかと思いますが、、、」
『あぁ、間違いなくパナマ運河と同時に』
　とその時副官がものすごい険しい顔でノックせずに来た
「パナマ運河が、攻撃に行ったとの報告が、きました、現在アメリカ海軍等が応戦に行ったいます」
「今すぐ聞く、総務部長」
『こっちも今入ったよ、いよいよだな引き締めろ』
「分かりましたでは」
『あぁ』と彼は電話を切った。
「はい敵は、１００を超えていて、主に艦載機の攻撃で行われているようです」
「わかった、警戒を1段階上げようとしよう」

その時サイレンがなった。
「なんだ」
副官が携帯電話で連絡を受けた。
「只今、航空より、敵艦隊を発見したとの連絡がきました」
「よし上へ連絡、旗艦に乗るとしようこの護衛艦隊の旗艦は?」
「ひゅうがです」
「艦娘達に関しては君に任せる実はまだメンバー表は見てない後、宮川幕僚長は、出頭は控えるようにしてくれいいな」
「はい分かりました」
と秋山はひゅうがに乗艦した。
２０３０戦記　第肆話終

第伍話

☒日本国　日本海　ひゅうがｆｉｃ　４月１日》
出港から数時間が経過したこと
「まだ敵艦隊を発見できないのか？」
「はい」
と秋山は利根川幕僚長より報告を受けた。
「うんどうしたものか、、」と彼は口をこもんだ
それもそのはず敵艦隊発見から行方がわからなくっなた。
それも出港してから直ぐのことだった。
（こりゃ長期戦は覚悟しないと行けないのか、、
やはり〝彼ら〟の技術は、、、、）とその時
「前衛ゆうだちより連絡、当艦隊より１０時方向距離９３ＭＩＬ、数６隻、艦種特定中」
と艦隊担当官は言った
「そうか第一種戦闘配置、艦隊はこのまま」
艦隊は第三警戒航行序列を取っていた

☒第一種戦闘配置ーー☒とブザーがなった。
「艦種特定しました、戦艦棲姫、雷巡チ、レ級、重巡ネ、駆逐棲姫です。」
「艦隊、西へミサイル発射良いーー及び彼女達を全力出撃直ちに」
「はい、担当艦は艦娘を離艦令を」
そして担当のあたご、ふゆづき、しらぬいの3艦は艦娘をを出撃させた。
「空母に関しては3分時間を取らせていただきます」
「幸い戦艦クラスの射程外だ連携射撃で良くても中破、いや大破まで持っていけいいな」
その場にいた皆が驚いたが『分かりました』と言った
「９０でミサイル展開いいな戦艦もそれで行くい、いいな、言い忘れたが艦隊は方位６０度へ及び第四警戒航行序列」
「はい分かりました」と言い作業に取りかがった
その数分後
「準備よし」
「攻撃よろし、ヤレ」
一瞬皆はわからんかったが幕僚長が気がづき
「砲撃よ～い撃ち方はじめ」
そして遂に海戦が開かれた。

１４発のミサイルを及び戦艦の砲撃がが敵に向かって行った
艦橋からは数秒後、敵が命中したのを見えただろう
「全弾命中、重巡ネ撃沈確認それ以外の戦果は不明」
「当艦隊は敵真横に向けて行く艦娘達には無理を言わせてしまうかもしれないがＴ字有利の状態を以上してほし」
確かにＴ字有利維持は至難の技であるが、、、
「分かりました艦娘隊に連絡いいな」
「はぁ！」
と準備して
「作戦開始」という号令が掛かり遂に撃滅戦が始まった。
「対艦ミサイル第２射よい」
「対艦ミサイル発射準備よし」
「攻撃よろし、ヤレ、そして戦艦にも第２射砲撃用意彼女たちに判断は任せる」
「戦艦隊発砲した模様です。」
「まぁいいだろう」
「空母隊より通信、『航空隊発進完了』とのことです。」
「航空隊は敵艦隊に向けて進行主に姫級クラスからやれいいなこれを逃すと厄介になる

ぞ」

その時

「ミサイル全弾着弾を確認敵かなり速力が落ちました。」

「よしここまでくれば大丈夫だろう水雷戦隊は肉薄攻撃を実施するいいな」

「分かりました」と担当官は返事をした。

そして

「航空隊が攻撃を開始した模様です。」

「よし水雷隊は突入し航空隊と共に攻撃、戦艦隊は支援射撃を敢行、本隊は艦砲射撃をするいいな。」

そして

「艦隊、艦砲射撃圏内です戦艦隊は支援射撃を開始しました。」

「攻撃よろし、ヤレ」

「撃ち方はじめ～～～」

そして砲撃戦が始まったそれと同時に水雷隊と航空隊の攻撃も始まった。

敵は射程圏内に入りようやく攻撃を始めようとしていた所で猛攻撃を受けってしまった。

それは砲弾、爆弾の雨であろう。

更には水雷隊の魚雷が命中しチが撃沈した。
姫級のクラスは砲弾が直撃し爆沈
レ級は、航空隊の攻撃と連携攻撃で手足が出せず轟沈した。
それは一方的攻撃だった。
「攻撃やめ」と秋山が言った。
「被害報告」
「全艦健在です。敵は壊滅しました。」
皆は驚いたが直ぐに気をと戻した。
「ふう、ようやくか」
「はい、まさかアウトレンジから強襲とは恐れ入りました」
「いや今回はタイミングよくできたし、ぎりぎりの所で判断した、一歩間違えれば、、」
「はぁ？」と利根川幕僚長は行った
「確かに意見具申するほどなく提督は敵艦隊を全滅しましたから」
「あぁすまなかった、皆の実力を見させてもらうはずが、、、」
「それより、休ませてもらいたい」
「分かりました」と利根川幕僚長
「では休ませてもらうと」と言い秋山は司令官室に戻っどた。

２０３０戦記　第伍話終

第陸話／第漆話

《日本国　舞鶴基地　４月１日夕方　司令官室》

「ふう、ある程度終わったか」

秋山は戦果報告をして着任式を挙行し一通り行った

実は彼はこうゆった儀式は苦手である。

「後々になったが資料でも見るか車内では機密は見れなかったからな。」

と彼は艦娘名簿を見た

「戦艦は一通り揃っているのか、気になるのはモンタナ、、そうえば」と彼は噂を思い出した。

まだ大湊にいた頃引き継ぎの作業中に舞鶴に関して洗い出していた。

その時に米軍の艦娘がいると言う情報があった。

「この子のことだったのか、空母は大型に関しては、一通り、軽空は鳳翔、瑞鳳、飛鷹型、瑞鳳、千歳型ぐらいか、重巡は利根型、妙香型、高雄型、最上型は全部揃っているのか、軽巡は天竜型、球磨型、川内型、阿賀野型、長良型の五十鈴、由良、阿武隈、鬼怒、だけか、駆逐は夕雲型は９割、で陽炎型も、吹雪型は９割、白露、朝潮型は全艦それ以外

も、水上機母艦は日進、秋津洲か、」と彼は名簿を見て戦力を評価した。
「で今回の戦闘は全艦が行って損害がゼロか」
　とその時ノックの音がした。
「モンタナ、入ります」と美しい声が聞こえた。
「どうぞ」
「しつれいします」
　とそこに現れた艦娘はカリスマ性の雰囲気を出し容姿は髪は結んでおらず細顔で目つきはちょと鋭く高身長だった。
「初めましてモンタナです、ここの艦娘長を努めてます」
「君が艦娘長なのかな、よろしく頼む」
　艦娘長は各地方隊の艦娘の長で秘書艦を務めることが普通である
「そうか定例になれば君が自分の秘書をするのかな」
「はい」
「分かった、君を任命しよう」
「ありがとうございます、拝命いたします」
　とその時
「提督、アメリカ太平洋司令官伊山大将がお見えです」と豊川副官

「あいつが？言っとくがあの人とはちょとした縁が合って、通してくれ」
「私は失礼しますか」
「あぁしてくれ」
「分かりました」と言い彼女は失礼した
　そして
「伊山大将がお見えになりました」
「いいよ」
「失礼します」
「お久しぶりだな秋山」
「伊山もな」と両者はまんえんみな笑顔押して
「あぁ二人っきりにしたいから豊川副官は下がってくれ」
「分かりました」と言い豊川は下がった。
「しかし、伊山か大将になったのか？聞いていないぞ」と階級章を見る秋山に対して
「実は４月付けで昇進されたから、この重みを流石にまだ実感がわかない」と伊山大将が
が行った
「自分は海将補に昇進の紙がまだ来ていないがね」
「君も厄介ものだね、まぁ来た理由は君が〝ここ〟に着任すると聞いて自宅から飛んで

きたのとちょと厄介なことになったからその件を話し合いに来た」
「パナマ運河の件か？」
「察しがいい戦闘は日本時間１６時で終わった損害は防衛側米軍主導で撃沈はなかったが出撃した船は全部大破又は中破で防衛の一部に穴が空いた」
「航空機は損害が多すぎたが墜落はなかった」
「ほう」
「米軍は今回の結果を受けて本土艦隊を一部パナマ運河付近に移動することが先程、海軍内会議で決定した明日緊急の上級司令官会議が行われて、そこで承認される」
「ふむ今回は損害が大きすぎたのは分かった、で敵の状況は？」
「それはあまり良くないらしい明日の会議で言われているらしいが自分は全滅していと読むかそれともある程度損害を出たが、想定より少なかったか」
「そうなると厄介だな、まぁ状況は分かった」
「あぁ、彼らも、特殊類の強い攻勢でよく耐えたと思う、それより、深海棲艦の進行を受けたんだっけここに来るときびっくりしたよ」
「あぁ、だが防ぐことはできた、まぁアウトレンジからの強襲でな」
「お前らしい戦術だな、そうえば今回の舞鶴襲撃未遂はどう見る」
「多分陽動かな、帰港して主力幹部と話してパナマ運河はアメリカの最重要拠点でここ

を潰せば米軍は特に海運、海軍を中心にめんどうなルートを通らざえない、更にはここは、元々は日本海の最重要拠点だがパナマ運河は、太平洋と大西洋だ、ここは無関係だからな」

「そう見ていいだろう実際自分もそう見ているが情報が少ない、最も精査すべきだろうな」

「うむ、そうえば、自宅から来たって話してたよね」

「実はこの南の太平洋側じゃない所に住んでいる。

実際の所、ここの〝地方〟にあるきっかけで住み始めたからな、今は妻もいる」

「え、奥さんいるのですか」

「そうえば言ってなかったな、まぁちょと色々あって、、、、」といい彼は苦笑いをした。

「そうか、私も早く決めなきゃな」

「そろそろ、帰らなきゃいけないな、このあと会議が待ち構えているから」

「改めて就任おめでとう」

「ありがとう、全身全霊を全うするつもりだよそちらもな」

そして伊山は執務室からでた。

その際に秋山は「私はここでやって行くつもりだ」と言い伊山はうなずいた。

秋山は受話器を取りモンタナ達を呼び今後の話し合いをした。

２０３０戦記　第陸話　終

ここから第漆話となります

第漆話

《日本国　舞鶴基地　４月９日》

タイピングの音が響く執務室内で秋山は仕事をしていた。

「ふぅ、これを終われば休憩だな」

「ええそうですね、何か雑談でもいいでしょうか」

今はモンタナと一緒に執務を行っている

そして

「よし休憩だな」

「じゃお菓子あるのですが」

「あぁお腹が空いた」と秋山は笑顔で変えした。

と彼女が持ってきたお菓子を食べつつ話をした。

「ここ最近は深海棲艦達は大人しいな」

「はいこれがいいかもしれません」

「いやこの状態を維持するのが俺たちの仕事」
「すみませんでした」
「いいさ」
「それより君は前の所属はどこだったの？」
「ハワイです」
「そうか」と返しつつ（アメリカも手放したもんだな）と考えこんだ
「どうかされましたか」
「いやなんでもない」
「そうえば秋山提督はなんで自衛官になったのですか」
「あぁ人を守りたいかな」ととぼける回答をした。
「そうですかそれはいいことですね」
　秋山は微笑みながら返した。
　その時パソコンがピロリンと音がした
「休憩は終わりだな」
「そうですね」
　秋山は遠征から帰ってきた部隊の報告書を見てモンタナに問いかけた。
「やはりここの部隊の練度はいいのか」

「はい」
「そうか」
「どうかされましたか」
「いいやなんでもない」
「はぁ今度、上京するんだけど何か言われそうな気がするんだよね」
「え東京に行くんですか。」
「あぁ行くよ、君も連れて行くよ」
「本当ですか」
「あぁ」
「観光ではないからな」
　といい秋山は（この人ひょとして、、、）となり
「仕事終わりに話したい事がある」
「いいですよ」
　といいタイピングの音だけが鳴り響いた。
　そして仕事が終わり
「それでお話とは」
「それが、、、自分と友達になってください」

「まぁ心が読まれてたのねいいですよ」
「え」
「まぁ何か縁以上に感じたので」
「よろしくお願いします」
「よろしくお願いします、後これは秘密で」
「えぇいいですよ」

２０３０戦記　第漆話　終

第捌話／第玖話

第捌話

《日本国　東京　国防省　４月２３日》

「ここが国防省ですか」

「ああそうだ自分も初めて来た」

その建物は旧防衛省のものをそのまましようしており姿、形は変わっていなかった。

その時

「やぁお久しぶりですね」

「橋本かお久しぶり」

「お前が来ると聞いてね」

「それより受付済ませたのか」

「今から」といい秋山は連れのモンタナと共に受付を済ませた。

そして秋山達は海上幕僚監部があるところに入った。

そこでは今日、会議が行われる。

秋山は秘書艦と共に着席した。

その場に居た人たちは提督クラスだった
そして海上幕僚長が入って来た
その人は白髪か生え顔は細長かったキリットしていた
起立敬礼をした。
「座ってくれ、そして秋山舞鶴提督はこれが初めてだな私は早川だ」といい秋山は礼をした。
「いいよそれより事態が緊迫している単刀直入に言う近く敵の大規模作戦が開始される、先日のザイによるロシア進行による北方大空襲があったのがトリガーだ」
その場に居た皆が息を飲んだ
「それに伴い迎撃作戦を展開する、場所は舞鶴だ」
秋山は表情を変えることはなかった
「今回は陸海空合同で行われる、更には今回は奇跡的に作戦日が分かった」
「今からその作戦を発表する」
「作戦名はマ号作戦だ統合司令官は秋山提督に任せることにはなる」
秋山は血の気が引いた表情をした。
早川はそれを見て
「まぁわかるが、場所が場所だけに現地指揮官を適任するのがいいのだろうと言うこと

だ。」
　そして作戦内容が説明された
　まず、航空軍が先制攻撃をして、その後に艦隊攻撃に移ると行ったものだそして後詰めは陸上軍が防衛及び漏らしを撃つものだった。
「作戦艦隊は第三護衛艦隊、第一護衛艦隊の2艦隊で行う四、二、五は第二陣として待機となる」
「では質問は、では各自解散準備してくれ秋山提督、残ってくれ」といい秋山は彼女を退室させ、秋山は早川幕僚長と二人っきりになった
　目の前の人は余り関わったことがない人だ
「とりあえず君には期待してるよ」
「それだけですか」
「いや今回の作戦次第によっては副幕僚に任命するかもしれない」
「本当ですか」
「早いのは分かってるが、兼任でやってもらうとことにはなるが頼めるか?」
「分かりました」
　早川はほほえみながら「では戻ってくれ」といい彼は去った。
　その後秋山は、作戦部より大まかな作戦書を受けとり会議をした。

２０３０戦記　第捌話　終

第玖話

《日本国　舞鶴基地　５月１日》

「受け入れ準備の状況は」

「業務隊等が主体で現在準備中です遅くとも明日には終了すると報告が来てます」

「悪いね、自分でも驚きを隠せないよ、でも若干アレンジしても全員帰らせるよ」

と秋山は微笑みながらデスクワークを続けていた。

そこに

「豊川です」

「あぁ入っていいよ」

「報告いたします、横須賀より、第一護衛艦隊が出港したとの連絡が有りました」

「そうか早いな」

「どうやら四国沖で、艦隊訓練をしてからだそうです」

「うむ分かった、そうえば、自艦隊の訓練終了は?」

「本日１４００です入港が１５００を過ぎます」

「分かった、それだけかい」
「いいえ後、作戦部より追加の資料が届きましたのでこちらも」
「ありがとう」
「では失礼します」
　と言い豊川は去った
　彼はその後デスクワークをしつつ作戦部より届いた資料を確認した。
「ふむそうゆうことか、作戦自体には影響が必須だな」と思いつつ、（我が国の防諜能力は伸びたな）と思った
「モンタナ、合同作戦部との会合はいつだっけ」
「はい、本日１５３０からです」
「そうか分かった」
「どうされました」
「いや、今来た資料は価値があるからな」といい彼は読みつつ作戦書と確認した。
　そして彼は作戦書を修正して、印刷した。
「うむ、彼らは、正々堂々、真正面からくるか、、、それなら楽だかなまだ気が抜けないな」
「そろそろお時間なのでは」とモンタナが言った

針は１５１５を指していた

「うむ、そうだな」といい秋山は会合に望んだ

一時間後には戻り執務を再開した。

そして秋山が帰るとき、モンタナが来た。

「あの、この作戦終了から、付き合ってもらいたいですが」

「あいいよ」秋山は笑顔で変えした。

モンタナは惚れた。

そして両者は帰宅をした。

２０３０戦記　第玖話　終

第拾話／第壱拾弐話

《日本国　京都沖　ひゅうがｆｉｃ　５月１０日》

秋山はひゅうが艦内にいた

第一護衛艦隊とは４日に合流し艦隊訓練を行った

そして遂に運命の日がきた

だが秋山はひゅうが艦内を指揮所として選択した

彼は周りにその意義を伝えた

開始時点　３護衛艦隊は敵の真前にいた

更に第２潜水艦隊より数隻借りる事に成功した

「皆が戦っている中自分は安全な所で見ていると色々自分の中で勘ぐるい等が生じる」

そして今、、、、

「もうまもなくか、、」

「はいそうですね」

時計の針は０９００をさそうとしていた。

そして

「時刻です」
「これからケ号作戦を開始する」
「第一段階開始」
　そしてまもなく
「哨戒艦より敵艦隊発見、方位９０距離９０ＭＩＬ、数１２隻以上空母等は不明」
「航空軍へ連絡」
「はっ」
　そして遂に攻撃が開始された
　航空軍所属のＦ－２戦闘機を主に対艦ミサイルによる左右交互の攻撃が行われたそれにより４隻が撃沈された。
「航空軍より通信、『ワレテキカン４セキゲキチンクウチュウセンハナシ』との事」
「小松へ帰投後打ち合わせどうりに返信」
「了解しました」
　航空軍は漏らしも兼ねることが追加で決定されたので一度小松へ戻ることになた。
　しかし秋山は考える表情をしていた。
「利根川幕僚長」
「なんでしょうか」

「違和感に気づかないかい」
「空中戦が行われなかったことですか」
「あぁそうだ、これについてどう思うか」
「敵側に空母がいないと不思議ですね奴らは制空権を捨ててまで何かを持っているはずです。」
「その考えてが一番だなその前に」と秋山は厳しい表情で「敵艦種は」
「まだで、今、前衛艦より連絡、識別確定した模様です。」
「そうか言ってくれ」
「はい連合編成で第二艦隊は軽巡ツ級が2隻、戦艦タ級が2隻、駆逐ナ級が2隻、第一艦隊は空母棲鬼2隻、空母棲姫、戦艦水鬼、軽巡棲姫2隻です旗艦は戦艦水鬼と思われます先程撃破したのはツ、タの全艦です。」
「空母がいた!!どゆうことだ、いったん落ち着こうみな」と秋山は険しい表情をした。
「はい、正直驚きました、が何か企んでいるのでは」と利根川幕僚長
「幕僚長達はどう見る」
「はい、敵は空母を持ちながら艦載機を発艦させていなかったのでおそらくは、空母の艦載機同士の空中戦を仕掛ける可能性があります」
「敵の司令官だったらそうしていたかもしれないだが今は空中戦をどんな手段を持ち込

み制空権を獲得しなければならない」
「そうですね手段は一つ小松基地へ、Ｆ－１５戦闘機を主にした部隊の支援要請を進言します」
　秋山は頷き「空母からの艦載機が発艦しないとも意味がない、航空軍の戦闘機を第一陣、艦載機を第二陣でいいだろう」幕僚長はうなずいた。
「よし小松へ支援要請を」
「通信士」
「はっぁ」
「空母機動部隊にも」
「はい」
　そして、空母機動部隊から通信があった
『加賀です』
「どうした?」
『艦載機妖精達が怒ってます今、落ち着くように指示していますがそれが火に油を注いでしまいました申し訳ございません』
「状況は分かった飛行隊長に変わって」
『飛行隊長の早見川だどゆうことだ』

「まぁまぁ落ち着け、君たちを失わせたくないんだ人員育成、パワーバランスを変えたくないんだわかったかなその代わり攻撃隊を9割ほど出していい」
『分かりましたでは』
『加賀ですこの度は申し訳ございませんでした。』
「いいいよ、いいよ発艦してくれ」
『分かりました』といい無線は切れた。
　その後
「航空隊発艦完了」と通信士から言われた
「更に今小松基地から戦闘機隊が離陸完了との報告が有りました」
「そうか分かったそうえば敵艦載機の報告がないが?」
「いいえ未だに受けておりません」
「そうか分かった」と秋山は言い（何故敵は艦載機を出さなかった?）と同時に考えて始めた。
「どうされました秋山司令」と幕僚の一人が聞いて来た
「何故敵は艦載機を上がらせなかったかだ」
「言われてみれば確かです」
「艦隊直上の制空まで捨てるのは歩ではない」

「利根川幕僚長」
「はい意見いいでしょうか」
「いいよてゆうかバンバン言って」
「やはり敵は艦載機による総力戦を展開するかもしれません」
「そうかもしれない念の為、予備の潜水艦隊に連絡して攻撃準備をそして第一護衛艦隊にもこのことを」
「はい」
　その時だった
「小松から発進した戦闘機隊から連絡『ワレテキセントウキトセッテキセリクウチュウセン二ウツル』
　とのことです」
「対空警戒厳重せよ」
「はい」
　そして制空権をかけた戦いが始まった。
　現代兵器の力は凄くまるでワンサイドゲームの主導権を握ったかのような戦いだった。
　しかしミサイルから逃れた機体もF―15、そして到着した艦上戦闘機隊に全滅させ

られた
　そして、、、
「攻撃隊から連絡『ワレテキニトツニュウセリ』とのことです」
「そうか」と秋山は言った
　その航空攻撃は激しさをました。
　直前までの戦闘機が敵視界内５ｋｍ手前からスモークを焚きその中を攻撃隊が進んでいった。
　危なっかしい戦術だが、これでも、追突などの被害はなかった
　そして航空攻撃が始まった。
　敵の対空射撃がある中、急降下爆撃　雷撃を敢行し敵艦隊を無残に手散らせた
　その結果は、、、、
「航空隊隊より連絡、ナ級２隻撃沈、我が方の被害なしです。」
　一瞬ざわついたが収まった。
　秋山も驚いた。
　が言葉に出さなかった。
「航空隊は基地に帰還、水雷戦隊よーい」
「分かりました」

その時だった。
「敵艦載機接近」
「護衛戦闘機を向かわせろ、水雷隊待機、対空戦よーい」
合戦ラッパと共に戦闘準備が行われた。
「護衛戦闘機隊は戦闘を開始」
「うち漏らしを打つくれぐれも味方に当たらないようにと各艦に打点」
「はっ！」
「統合戦闘士官」
「はい」
「対空戦の指揮をお願いします」
「分かりました」
遂に、、、
「護衛隊はより連絡漏らし数２５発生」
「みようこう、あたご、撃ち方よーい発射」
「みようこう、あたご、ミサイル発射」
５５発のＳＡＭが敵へ向かっていく
ただ敵は回避するか、突撃しかなかった

「全弾命中、全機撃墜」
「護衛戦闘機隊より連絡『ワレテキヲセンメツシタリワガホウヒガイナシ』とのことです」
「よし水雷戦隊よーい、戦艦隊は水雷戦隊の支援、空母機動部隊は退避、第一護衛艦隊にも連絡『獲物は共同で』と」
「はっ」
「これから当艦隊も突貫するいいな」
「はい」
「準備を」
　そして準備が行われた
「これから第二段階へ以降する厳しいくなるがこれをたいきれば勝利だいいな」
「よしこれから輪形陣から複縦陣へ」
「第一護衛艦隊にも連絡」
　そして艦隊は陣形変更をした
　冷静に変更をした。
　そして
「全準備完了」

「よしこれから一と共同で敵を叩くいいな突撃令を下す」
「攻撃よろしヤレ」
そして遂に水雷隊と共に第三護衛艦隊と第一護衛艦隊が突撃を開始した。
戦艦隊は砲弾を降らしその中を水雷隊が進むその背後から本隊そして敵から見て右翼からは第一護衛艦隊が
万が一左翼から逃れても潜水艦隊がおり敵はそれを知らないため逃れられないのである。
「敵、突っ込んで来ます」
「このまま大丈夫、信じろ」
水雷隊は素早く砲で敵をかく乱して魚雷で沈めるといった戦法で冷静に敵を葬った
その背後を第三護衛艦隊が、右翼は第一護衛艦隊からの砲撃で完全にワンサイドであった。
それは、敵を撤退させないための素早い戦術だった。
敵側からの景色は災厄で有るであろう、、、、
そして
「敵艦隊全滅」
「砲撃やめ、現状待機、艦娘隊は、交代しながら艦隊周辺を警戒、警戒要員以外は上がっ

てよし、配置はモンタナに任せる。戦艦隊も来てくれ」
「一時間以降敵は現れなかったら戦闘終了を宣言する」
待機の時間はヒリとする
弾薬は底をつくかのぎりぎりだった
そして、、、
「一時間経過かよし作戦終了を宣言する各艦隊お疲れさま、第一護衛艦隊も舞鶴に入港せよ」
「疲れさまでした」
「あぁそうだな、まだ海の敵で良かったこれが空もいたら、、、」と秋山はリラックスした
「ええそうですね我々の航空隊は1分足らずで全滅ですよ、航空軍の航空隊でも、、、」
女性の声がして、作戦中いない人だったので皆はびっくりした。
「モンタナか、入る時は言ったか？」
「はい言いました、ただ返答がなかったので」
「そうか今の時間は？」
「今は１３００です」
「飯は？」

「そうえば今日はカレーだったな、よし食堂に行こう」
「はい」といいｆｉｃにいたメンバーは食堂に行った。
２０３０戦記　第拾話　終
第壱拾弐話
《日本国　舞鶴基地　７月１日》
モンタナと付き合って１ヶ月ちょと
彼女のことも分かってきた
がここで自分の昇進がきた
前々からだったか副幕僚を兼務することとなった
これから忙しくなるのは見えていた
そんな所にモンタナが「今日夜０８００に本屋上に来てください」と言った
自分は?を浮かんだがそれすらを通り越す引き付き事項が多くここ最近は自宅に帰ったら飯を食って入って寝ると言った生活が続いていた。
仕事を終わって時間まで戦術の研究を久々にやったこれは司令官時代からやっているものだった
ただ艦娘との連携は研究しながらの勉強だった
そして食堂で飯を食って屋上に来た

　そこにはモンタナがいた
「提督夜分遅く呼び出してすみません」と彼女は礼をした
「いいよ別にこっちは疲れてたから」
「今日貴方を呼び出したのはある事を伝えるためです」
「それである事とは」
「まぁ焦っるのはいけないので結果から言いますねこれは”仮”の姿です」
「はい」と秋山は?を思い浮かんだ
「では解きますね」と言いモンタナは自分の意識を集中して解いた
　そこにはモンタナではなく青ががったの銀髪の毛で真紅の瞳でカリスマの雰囲気を出していた
「私の名はレミリア・スカーレット」
　秋山はポッカーんとしていた
「まぁこの姿は驚くよね、ちなみに自分は吸血鬼だから」
「おぉおう」としか言いようがなかった
「何故この道へ入ったのですか」
「まぁ色々合って入りました」と言い彼女は何か隠しているような目で見た
「そうか触れないで置くよ」

「信頼できる人に見せていいと自分の考えてたので」
「そうか」
月が光る中彼女が美しかった
確かに彼は惚れてしまった
その時基地内に警報が鳴り響いた
港の方から騒がしくなった
当直艦一斉に出港準備をした
秋山は即座に連絡を受けた
「モンタナ直ちに全艦出港だ今回は潜水艦が来たらしい」
「はい対潜隊を中心にします」
「ではそれで指揮は利根川幕僚長を中心に艦艇を出港させる用意で」と言い秋山は舞鶴基地の指揮所に行った
２０３０戦記　第壱拾弐話　終

第壱拾参話

《日本国　舞鶴基地　7月2日》

潜水艦隊襲撃から一夜

被害はなく全艦撃沈させたが気になる点が合った

「まず先に潜水棲姫が当海域に現れました」

秋山は根川防衛部部長と話をつけていた

彼はキレやすい性質だがうまくコントロールして人望が厚い

「潜姫が前線にいた事は正直驚いた、情報偵察だろうな」

「はい」

「だろうな、そこに関しては聞いている通り午後に将のオンライン会議を予定したそこで意見を聞く」

「ただ君の口から報告を聞いて上へ通しやすいかった」

と根川いい秋山は礼をしながら切れた

「秋山副幕僚」と聞き覚えがある声がした

「その名前はよしてくれ総監か提督でいいよそれよりどうした」

「自分の考えはいいでしょうか」
「いいよ」
「これは情報収集と同時にある種試しではないでしょうか」
「そうだな実は軽度と見ていたがどうも外れ旗艦に行った」
「ええ、それでは舞鶴合同会議はいつ開かれますか」
「今が０９３０か、一時間後で調整つけて無理だったらいいから」
「わかりました」
　と言いモンタナは秘書室へ戻った
　閑話休題、秘書室は主に連絡、提督不在時の対応をするところである
　モンタナはそこではあまり仕事したくない希望がある
　話を戻し秋山は仕事をしながら会議までの時間を有意義に使った
　そして会議の時間となった
「諸君、いや幕僚達と呼ばせてもらおう、昨日の件は助かったが不思議なことに敵大将自ら偵察に来た」
　皆はうなずいた
「知っているかもしれないが今日緊急の会議が行われる事となったそれで皆の意見を知りたい」

雰囲気は気まずかったが、直ぐに宮川幕僚長がいった
「はい今回は敵は偵察と思われますが矛盾点が生じますただ、このタイプは初めてなので、なんとも言えないのが正直な話です」
「そうだ、これをどう捉えるか君達に意見を聞く」
皆は考えこむ表情をしたそれもそのはず敵は再び舞鶴に攻勢を掛けるかもしれないが負けているので諦める必要が合った、いや通常そうゆう判断してよかった
「取り敢えず、簡単ではないか哨戒機を増やし投下ソナーは周囲の艦船に影響のない範囲内ではどうでしょう後艦船は即時待機と」と山口防衛部長は言った
「今の現状ではそれしかないかと自分も思います」
「宮川も言うのであれば今日行われる会議で言うしばらく皆には迷惑かけるか」
秋山は周囲を見て異論がないか言って確認をした。
なかった
「短かったがこれでいいですか」と言ったら頷き締めた。
そして秋山を中心に書類を作くり会議に出席した。
２０３０戦記　第壱拾参話　終

第壱拾肆話

《日本国　舞鶴基地　7月9日》

例の潜水艦襲撃から一週間、各地に現れ撃退すると言った事が行われた
2日に行われた緊急会議では敵に進行有りとの可能性大と結論付けた。
ただそれがどこなのかはっきりしなかった。
話は戻るが、ここ連日潜水艦隊が現れ出動するっといった事が合った
現場は焦りを見せていた、、、、、、
「まだ報告が無いようだな」
（2日連続となると敵は判断して攻撃場所を探っていたが果たして、、、、）
「提督失礼します」とモンタナが入って来た。
「あぁどうした?」
「はい先程遠征から帰ってきた艦隊が敵小規模戦隊を攻撃しましたが様子がおかしかったとの報告を受けました」
「その子を連れてきてくれ、ある程度済ませたらでいいから」
「わかりました」と言いモンタナは下がった

１０分後
「提督、能代を連れて来ました」
「能代入ります」
と言いモンタナは能代と一緒に入った
実はこの時が能代とは初対面である
「さてまだ報告書を読み途中だが聞きたい事がある
まぁ楽にしてくれ後座ってもいいよ」と秋山は笑顔で言った
能代は「わかりました」と真顔で言った
「そんなに怖がらなくてリラックスは大切だからね」
「はぁ」と言った
（やはり前任までの影響か）
「まぁいいよそれより報告があったが、敵が謎の行動をしたって本当なのか」
「はい帰投途中、レーダーにて発見、折り返すため、迎撃を考えてた矢先、敵が撤退しました。発見した距離から長距離魚雷の発射も考えたので之字運動をしましたがソナーからは魚雷が来ていないことから之字運動を終了しました」
秋山は考え込むように敵のあらゆる想定をしていた
「モンタナ全幕僚を集めてくれ、合同を４５分後に」

「わかりました」
　モンタナは秘書室へ戻った
「まぁ能代の意見も聞きたい、現場から何を受け取ったか」
「はい、敵は何か試したかったんですかね、う～んと戦略はわかりませんが」
「いいさまぁその拙論がいいかな、実際自分もこれから敵の出処、意味を探って行くから」
「わかりました」
「ごめんね時間取らせてしまって」
「戻っていいんですか」
「ごめん言葉数が足らず、戻っていいよ」
「わかりました」と言い能代は敬礼をして戻っていった
（とわゆものの、一段階敵も上げたのは事実、ただ、何か引っかかる、再攻略か、いや）
（再攻略！まさか敵の狙いは、、、）
（だとすると能代たちが戦っていたのは!!!）
　彼は直ちにモンタナと連絡して豊川副官にもいいそして早川幕僚長とその提督クラスのメンバーを集める事に成功した
（まさか一手噛まれたとは）

場所は会議室
プロジェクターで投影されたリモート映像とつなぎ秋山は考えを伝えた
「開口一番に申し上げます、当基地、舞鶴が再攻略される可能性が極めて高くなりました」
モニター越しだったが、ざわめいた
だが、横須賀、早川幕僚長は頷いた
「実は、先程、横須賀のシステム隊が極めて短い文章をモニター越しに受信した」
「話していいでしょうか」
「いいよ」
「はいこの解析結果、『マイヅルニシンコウエンシュウハムイテイル』との報告を受けている」
その場にいた皆は考える手打ちをしていた
「これが罠ということは?」と羽田新大湊提督は言った
「うむそれも含められる」
「ただそれをあえて漏らすか?」と呉の金城提督は言った
彼は教科書どうりの戦術を繰り出すのとそれに見越した戦略を得意とするが奇才の戦術、戦略はやや劣る部分がある

「うむただ今までの戦略的思考は通じない、その点は知ってるだろ」と宮間佐世保提督は言った

金城提督は頷いた

「だが今の事を考えるとひょっとしたら敵は墓場を掘った可能性がある」と早川幕僚長は言った

「よし、皆には警戒度を最高に上げ、哨戒行動も増やせ航空集団には申し訳ないが踏ん張ってくれ無人は２４時間で、航空軍のドローンについてはこちら側で協議する」

皆は頷いた

「よしでは解散、秋山副幕僚長兼舞鶴提督は残るように」

そして二人っきりになった

「まぁ昇進後初の作戦になろうとしてるが意見は大丈夫になる」

「すみませんでした何も言えず」

「まぁ確かにあれは正論で通っているから出る幕はなかったが違和感を気づけば言ってくれ、では」と言いモニターが切れた

そして秋山は結果を幕僚達に伝えた

２０３０戦記　第壱拾肆話　終

第壱拾伍話

《日本国　日本海　ひゅうがＦＩＣ　７月１９日》
時刻は１９００
「敵は」と強きで発言する秋山がそこにはいた
「はい、予測通りです、当艦隊西６５ＭＩＬ」と通信員
１０日に敵が異常な行動を見せたので近々進行が行われるのではと言われ遂には来てしまった。
敵は１５隻構成だった
「敵は本当に学んでいるのですかね」
「敵は予想を覆す、今回は二重作戦だからな」
「はいまさか敵は横須賀に進行するとは思いもよりませんでした」
そう横須賀に敵は本気で仕掛けてきたのだ。
「援軍は小松基地か」と言ったその時
「敵、監視ラインを突破」と作戦オペレーターが言った
「海保には事前予告どおりに通報、全軍配置は」

「はい済んでいます」
「よし第一段階開始、航空隊に攻撃を下令してくれ」
「もう済んでいます」
攻撃隊
「敵はいまのところは来ませんな」と赤城航空隊兼舞鶴航空隊戦闘長、米山は言った
彼はおやっさん性格だが現実を見る妖精である
「そうだなこれは敵は夜間艦載機は積んでいないかためているかのどちらかだ」と早見川は言った
「よし攻撃を開始する敵はレーダー等を使用してくる可能性がある、制空隊例の物は」
「隊長、もうばら撒きますか」と大鳳所属制空隊隊長見川が言った
彼は隊を和らげるフレンドリーながら空中戦闘では右に出る物はいなく更には数少ない墳式免許持ちである。
「了解、ついてこい皆ども」と言い制空隊の一部が陽動兼妨害の行動を始めた
そして指定距離に達した後
「チャフ展開」と言いチャフをばらまいた
これで敵はレーダーが一時的に不可能を限りなく与えた
『隊長仕事を終えました』

「よしそのまま合流、1つ参りますか」と言い攻撃隊は攻撃を開始した
敵は警戒を一応していたが海上迷彩の攻撃隊を補足することは不可能に近かった
一隻一隻確実に仕留めていく
「攻撃隊より通信『ワレテキカンゴセキゲキチン、ソレイガイニモヒガイヲアタエタソンガイゲキハゼロヒダンソンガイロク』」
敵は夜間戦闘機を護衛として出したそれで多少の被害はでた
「撃沈艦は」
「はい空母棲姫2、駆逐ナです」
「よし、航空隊は空母に着艦、先鋒の水雷特設合同隊は?」
「はい、準備はできているとつい先程」
「特設隊に下令、突撃し、敵を撹乱せよ」
「了解」と言い段階は次へ進んだ
「本部より通信『トツゲキセヨ』とのことです」
「よしでは行きますか幕僚」と第7護衛隊司令羽田は言った
彼は突撃がうまく海の撹乱者と言われるほどだった。
幕僚は頷いた
「よし突貫、味方の誤射には気おつけろ」

遂には撹乱が始まった
第一水雷隊、第二水雷隊、そしてゆうだち、すずなみ、まきなみは突撃した
そして敵はかれいに応戦したが、相手は高度な連携をしたので当てられず2往復しただけで、敵の4隻は撃沈した

「合同隊より連絡『我、駆逐水鬼、軽巡棲姫、戦艦レ2隻を撃沈損害なし』とのことです」
「事は運んでいるがこのまま突っきてもいいかもしれないが」
「残存の敵艦隊は」
「はい南方棲鬼を中心に第一艦隊は戦艦棲姫を2隻のみ第二艦隊は空母ヲが2隻軽巡ツが1隻軽巡ホが2隻、駆逐ハ級となっています」
「第二艦隊を先に叩く別働隊は?」
「はい第二陣展開準備完了との報告が」
「よし水雷隊は遠くから魚雷を投射その後退避戦艦隊による砲撃で沈ませる陽動はｓｓｍで行く」
「了解」
そして
「準備完了」

「特設隊は」
「そちらも完了済みです」
「対艦戦闘始め　、攻撃よろしヤレ」
「戦艦隊、攻撃始めｓｓｍ第一斉射」
「モンタナさん旗艦からの通信は」と大和
「はい、攻撃です、各艦、照準合わせました?まだの方は」
「いないようなので第一斉射良い護衛隊は砲弾落下位置から下がって」
「分かったよ」と川内
　護衛隊は下がった
「夜偵からの情報を元に第二艦隊へ攻撃を敢行する射撃よーい」
　各艦の砲が照準に合わせた
「打って!!」
「ｓｍｍ第一射目弾～着着着」
「陽動成功、撃沈には至らなかったが中破に追い込んだ模様」
「分かった戦艦隊の砲撃は」
「はい魚雷の陽動が功を奏し第二艦隊は全滅しました」
「よしこれから基幹艦隊に向けて攻撃を開始する」

瞬時に士官たちは動いた
それともに艦隊全体が最後の攻撃に備える準備もした
そして
「全艦隊突撃、敵を撃破せよ」
遂には、突撃が開始された
ひゅうがと護衛のちょうかい、あたごを除く第三護衛艦隊と水雷隊、そして空母航空隊が突撃した
敵はようやく立て直したと思えば、レーダーはチャフで使用不能となり航空隊の攻撃にあい、更には空きを与えないような連携で、水雷隊が突撃、更には戦艦の支援射撃で、敵はものの15分で壊滅した
「敵全滅を確認しましたこちらの被害はなし」
「戦闘用具はまだ納めるな警戒を維持」
一定時間後
「よし戦闘用具納め」
「戦闘用具納〜め」
「ふう終わったな」
「提督」と声質がいい女性の声がした

「うわびっくりしたモンタナかうむ司令長官室で話は聞くよ、それより今は何時だ」
「２２００ですよ」
「そうかじゃぁ飯だな、それより横須賀からの通信は？」
「今解読中です終わりました、被害はなしで勝利だそうです敵艦隊は全滅です」
「そうか飯を食って司令官室へ戻ろう」と言いモンタナを連れて食堂へ行ったのであった

この戦闘では深海戦艦らが二重作戦を初めて掛けた戦闘で有り軍事関係者らが驚くのは他でもなかった

２０３０戦記　第壱拾伍話　終　海上軍編終

第一版設定資料集＆陸点伍話

まず初めに
投稿者はキャラター設定が苦手です
そこを理解した上で見ていってください
ネタバレ要注意

秋山清瀬
階級　海将補
年齢３２
最年少で副幕僚長兼提督になった人物
状況判断が得く犠牲をともはない戦いは嫌いな人である
高身長で顔貿がいい（目は細め）
ある事がきっかけで国防軍に入ったらしい
伊山博多
年齢３２

こちらも最年少で米インド太平洋軍総司令官となった
米陸軍所属で詳しい活躍は今後明らかになるだろう
秋山と同様あることがきっかけで米軍に入った
身長はよく細めで顔つきはよく人望はある
（目は切り目）（鼻は太い）
モンタナ（レミリア・スカーレット）
階級一等海佐
舞鶴で指揮能力が高いが視野がやや狭い
カリスマの雰囲気を出している
顔質はよく美少女であり無茶な命令はしない模様
何故入ったかは不明
宮川さやか
階級一等海佐
年齢　に　あ、はい本人からの希望で極秘
体は弱いがスッパっと動けてやや幼い容姿が残る女性
主に提督の不在時の地方指揮を取る
実はある秘密があるらしいが、、、、、、、

（アサルトリリィの御前似）
山口中居
階級　一等海佐
年齢２８
忠実に仕事はでき長期的戦略を読み取る事ができる人
だがやや行動に自身はなくたまに不安になる
イケおじで顔質はよく渋い声を出す
（銀英伝ノイエのムライ似）
能登的屋　（てきや）
階級　二等海佐
年齢２７
かなり若い人でやや経験不足は拝めないがそれを感じさせない戦術判断持ち主
男性でこれっといった何かはあるとは感じさせない
顔質は鼻がすっとしている髪はくせっ毛らしい
声は高いのが特長的
（某ロマンスグレーの若き頃をイメージ）
川越秋久　（あきく）

階級二等海佐
年齢３７
そこそこ若く経理系なら得意とされている
元警備隊だった為か体力は自身がある
噂では特別警備隊所属だったのではと言われているが本人は黙殺している
顔室はよかったが昔はモテなかったらしい
室内戦はめっぽう得意
（目は細めで面顔である）
中村藤沢　（ふじざわ）
階級先任伍長
年齢２８
まとめるのがうまく戦術面では卓越していて３０前で先任伍長と言う立場
まだ経験不足ではあるがある程度は見込める人物
ある趣味を持っているのがみんなの前では見せられない、なお男である美談である
男性でちょっと高い声を出す
（目は丸く口は細い）
豊川武蔵

階級二等海佐
年齢２６
舞鶴生まれ舞鶴育ちの地元の人
土地には詳しくたまに案内人を務める
実は軍事にめっぽう詳しいが周りには言っていない
顔質はそこそこで声も年齢に近い
（下に細くひげがあこひげタイプ）
利根川隆介（りゅうすけ）
階級一等海佐
年齢３０
第三護衛艦隊に永らく努めておりいつい異動されるのか逆に不安しかない人
ただ敵の真意等心理戦では行ける
更には戦略が得意
顔質はすっとした顔で声質は高い
（ひし形で優しい）
金子海音（みおと）
階級二等海佐

年齢■■
港務隊長で高校受験を控えた子供を持つ
そのため余り長距離はいけない
ロングヘアーで年相応の顔質でよい
七彩蓮加
階級三等海佐
年齢聞くんじゃね
女性で筋肉があり、室内戦が得意
格闘き章持ち（この時代は陸海空共通）
イケメンである
手野海良（かいら）
階級一等海佐
年齢２８
警備隊司令で陸上軍から実は恐れられている（噂ではｓ特から恐れられている）
白髪があり、顔質はよい
明智智一
階級一等海佐

年齢３１
舞鶴教育隊隊長で厳しく当たっているが
なんと心理士でありなんと脱落はゼロと出ている
筋肉モリモリである
疾風重蔵（しゅうぞう）
階級一等海佐
年齢５７
舞鶴で掃海一筋でありうまく皆からはおじさんと呼ばれている
退役が間近である
第４４掃海隊司令
疾風沖風
階級一等海佐
年齢５３
兄に憧れ掃海の道へ
実は兄より掃海技術はよく表彰された
おやっさんと呼ばれる
水中処分隊司令

重蔵と沖風は兄弟
野澤厚
階級一等海佐
年齢３２
第二哨戒隊司令ではやぶさ型哨戒艇を操り高速戦闘をする
天パでそれが悩み
秋式荻窪
階級一等海佐
年齢２６
舞鶴弾薬補給整備所所長で実は謎が多い人物
顔質はよい髪型はストレート
小沢桂子
階級一等海佐
年齢あら、ピーーされたい
業務隊司令で財務に厳しい女性
しかし戦ごとは認めている
ショートヘアーである

小沢圭一
階級一等海佐
年齢２９
衛生隊兼音楽隊司令で桂子とは兄妹で潜水艦乗りでもあった
髪型はストレートで顔質はイケメンである

橋本健介
階級一等海佐
年齢３５
人事を掌握する人物
巧みに言葉などを操る男の人でそれは”橋本劇場”と呼ばれている
顔質はよく性格はフレンドリーである
（ヤマトの真田副長）
早川知久（ともひさ）
階級海上自衛隊幕僚長
年齢５９
そろそろ退役の幕僚長でオールラウンダーとしての性格であり部下には厳しい命令

を出すこともあるが負けを認めるときは認める人
後輩指導はうまく色んな所で手腕を出す
顔はよくできている声は貼っている
白髪が３割超えている
（斜め顔）
手野智洋　（ともひろ）
年齢２９
階級一等海佐
舞鶴警備隊隊長で任務には誠実
だがフリーになると手放す性格
顔質はよくイケメンである声もいい
三城高本　（みしろたかもと）
階級二等海尉
年齢２５
手野の補佐をしている
どうやら彼には色んな噂が有る
顔室はよい

声も高音である
世界観設定
この世界について
貿易はスムーズには行かないものの軍に守られており一応は国連等は機能する
更には米露軍事外交協定等が有り一応冷戦は起きにくいされている（それでもにらみ合いが続いている）
特殊類について
陸海空全てに現れる人外の総称
兵装は海を除く近代化されつつあるが戦術等で対等になっている
日本
中谷政権で一気に変わった
特に軍事外交等で大きな成果を出した
更には在日米軍を特定条件下で指揮下に入れる事になった（これも中谷政権下でしたことであり、ちょうど特殊類が来た頃だったので意外にもこの人が何者なのかと度々議論されている）
更には自衛隊は国防軍としてなった
なお内政はこれ以上でた模様

中谷は存命中
その中でその後釜?として宇佐美がついておりそちらの手腕は高く中谷からは高い評価を受けている
なお国民からは評価も高い
日本国国防軍（日本統合軍）
陸上軍、海上軍、航空軍有り航空軍の下には宇宙作戦隊が有る
管轄は国防省で国防省は旧名が防衛省で有りその下の防衛装備庁は国防装備庁としてなっている
システム等は概ね変わっていない
現統合幕僚長は能勢哲夫で有る
海上軍
海上自衛隊からは大きく変わっておらず強いて言うのであれば航空遊撃／離島防衛を主任務とする第５護衛群の創設でありこれがキーポイント
護衛艦数は増え地方隊直結もありなんとか回せている潜水艦は微増
他は強襲揚陸艦が増え混雑しすぎた艦種をやや整理下ぐらい
航空海軍としてめっちゃ強い

導入作品一覧
艦隊これくしょん
ワールドウッチーズ
ガールズアンドパンツァー（一部）
ハイスクール・フリート（一部）
ガーリーエアフォース
東方Ｐｒｏｊｅｃｔ（一部）
ドールズフロントライン
蒼き鋼のアルペジオ
今明かせる作品としては以上（増えます）
おまけの陸点伍話

《日本国　舞鶴基地　４月２日》
秋山は仕事をしていた
そこにノック音が響いた
『豊川です、昨日挨拶できなかった人達を連れてきました』
「入って来ていいよ」

『失礼します』と言い豊川の後ろに１０人程の人達が入って来た。
　みな敬礼をした。
「はい舞鶴周辺の海上軍の責任者を連れてきました」
「では豊川副官の隣の人から言ってくれる」
「はい私は金子海音港務隊長です階級は二等海佐です」
　と彼女はロングヘアーで整った顔質をしていた
「舞鶴陸警隊隊長の七彩蓮加と申しますし階級は三等海佐です」
　とこちらの彼女はイケメンの女であった
「そして私は舞鶴警備隊司令、手野海良であります階級は一等海佐です」
　彼は大湊であっているから問題ない容姿は普通だが何かのオーラを感じた。
「舞鶴教育隊司令明光智一等海佐であります」
　とこの男は体格が筋肉モリモリだった上によくできていた
「第４４掃海隊司令の疾風重蔵です階級は一等海佐ですよろしくお願いします」と彼は白髪が合って退役が間近と思われた
「水中処分隊隊長の疾風沖風です、一等海佐です」
　と彼は重蔵と顔質は似ていた
「第二哨戒隊司令、野澤厚ですよろしくお願いします」

「舞鶴弾薬補給整備所所長の秋式荻窪です階級は一等海佐です」
「舞鶴基地業務隊司令、小沢桂子ですよろしくお願いします」と彼女はいい声の持ち主であった
「衛生隊兼音楽隊司令、小沢圭一ですよろしくお願いします」と彼は桂子と顔質は似ていた
「当基地舞鶴周辺の責任者を紹介しました」
「そうか今後ともよろしく」と彼は立って敬礼をした
「まぁわからない事があれば何か言ってくれ逆に年齢的にも舞鶴は初だから、自分がわからない時があったら教えてください」と彼は礼をした
「あぁ君達の事情はちょと知っているまぁそんなことはしないさ」と秋山はいい
「ここは兄弟が2組いるのか、うんまぁなんとも言うが」
「はい、小沢さんと疾風さんたちです」
「うむそうだな手野さんにはあの時は助かったあの時はお礼すら言ってなかったな改めてありがとうございます」
「いいえ」
　じゃかんざわついた
「まぁ無理もない実はその時にここへの移動が言い渡されたから」

「よし今後ともよろしくお願いしますでは持ち場に戻って下さい」と言いい皆は敬礼をした

そして彼は職務を続けた

２０３０戦記第陸、伍話　終

第壱拾陸話

《日本国　???　４月６日》
「またか」とある女性は履いた
　彼女は司令室で執務をしていた
　この時基地内は第１種戦闘配置を出していた
　彼女も指揮場への準備をする
「知川司令」
「行こうか」と指揮場に行った
　指揮場
「千歳からの増援は」とその男性はがたいはよく柔道をやっていたかのように見えた
「はいなんとかそれで持ちこたえてます」
　敵は既に１００を越していた
「失礼します」と女性が現れた
「知川司令どうします」とその時
「どうやら敵はネウロイ、ザイでここ三沢を潰すのは目に見えている」と先程までのまた

違った声の持ち主がいた
既に画面上は混戦状態を表していた
その人は白髪が見えたが、顔つきはよかった
「伊山司令」と敬礼した
ここは三沢基地
そう青森にある日米の基地だ
この時、米軍も総動員しての防衛に当っていた
これは”基地司令が判断し国防省及びアメリカ関係に通達”したのであった
「兼久司令、百里及び小松に増援ができるか聞いてる」
「聞きました全機即時待機と」
「金子戦闘隊長、耐えられる?」
『うーん正直な話し耐えられない』
「わかった、小松、百里に援軍要請、単冠湾及び大湊の海上軍にも増援を」と兼久司令
「うむ確かに海軍にも来たほうがいいな」
とその時
『こちら３０１、３番機、寧夏だ申し訳ない突破された模様だ目視で確認した機種はネウロイ機数３』

「対空戦闘」と叫び基地の対空兵器は迎撃を開始した
直ちに短距離地対空誘導弾が発射された
ミサイルは目標に向かっていく
結果全弾命中
敵は撃墜された
「司令、小松、百里の増援及び海軍が来ました」
「よし、味方の誤射には気をつけろ」と知川兼久司令
「敵の第３波を確認と６０１ＡＷＡＣＡから数５０距離２０ＭＩＬＥ」とオペレーター
「今いる対空艦は？」
「はいつき型一隻、あたご型、こんごう型二隻です後は、むら、なみが少々」
「入間からの指示は」と伊山
「はい、今、後方と詰合せしているらしいです」
「ちッ、対応おせえんだよ」と兼久司令は嘆いた
「入間から連絡、横須賀から米軍を含む艦隊の出撃を海上軍から連絡を受けました今、現場まで駆けつけている模様」
「そうえば気になったんだけど単冠湾の”やつ”は」
「はい、滞在中です」

「よし、かさぎの航空隊を出す、制空戦闘で」
「分かりました」
　と言い士官は、作戦担当に指示した
「入間から厚木に展開中の米海軍戦闘機隊を出撃させるか問い合わせがきてます」
「霊寒司令、峠司令」と兼久は問いかけたい
　両者はうなずいた
「厚木及び入間に打点、要請支援」
「かさぎ航空隊、後、１０分だそうです」
「第一護衛艦隊の通信が入っています」
「つなげてくれ」
「はい」と作戦担当は言い繋げた
『こちら第一護衛艦隊、水上艦隊司令、成田流一だそちらの支援をする』
「分かった、でそちらの要件は？」
『第３波を仕留めます、幸い、アメリカ海軍即応艦も連れて来たのでこれで落としますその後合流します』
「分かった」と兼久は言い
　羽田はうなずき通信は切られた

移した画面上のマップは既に最初より少なくなっていた
が奴らは火力で圧倒できる存在であるためなかなか倒した感覚にならない
司令は弾薬も心配になった
かれこれ隙間なく撤退できる事がなく苛立っていた
「厚木より展開された戦闘機隊が来ました」
「かさぎもきました」
「これで撤退ができるか」と知川は言った
とその時
「第3波消滅」
司令達はよしと心の中で喜び
「第一護衛艦隊から通信は」
「はい合流すると」
「うむうまく行くといいが」
「まぁ正確には指揮すればいいですから」と言った
そして、総力戦が展開さてた
空は地獄絵図のようだった
火花が時々見られた

巧みに戦術を操りそれは立体的に、うまく、押して、海上との連携も自由自在に操った
敵は質で圧倒したが、地獄しかなかった
そして
「敵殲滅」
「念の為ＣＡＰをこの基地から出せるか?」
「出撃した機体すべて、弾薬、燃料もつきかけてます」
そこで海上軍に頼んだら了承を得た
「ふう終わった」と知川と言った
「後で報告会をしましょう米との合同で」と伊山司令
「その前に休憩しますかと」兼久は言った
そして、うなずき後処理を部下に任せて、彼らは去った
２０３０戦記　第壱拾陸話

第壱拾玖話＆弐拾話　合併話

《日本国　舞鶴基地　７月２０日》

戦闘の翌日

タイピングの音がする提督執務室

その音を遮るノック音がした

「失礼します」と珍しく豊川副官が入ってきた

「どうした」

「今年の夏の人事が出ました」

「今年は異常な位の敵が攻勢を仕掛けたから遅れるのも分かっていた」と紙を見ながら言った

特に今期は海上軍では早川幕僚長が定年退官となった

「まだ学びたかったがな、えまじ？」と秋山は目を大きく開いた

「どうされました？」と豊川

「砦海東子先輩!!!、えーと若干不安になったな」

「その人は若いんですか」
「自分の1期上で」
「マジですか」と豊川は本音を漏らした
「まぁ言いたいのも分かる、本当に人事関係頭狂ったか？上の人達は何を考えてるんだ？」
「この人、元の第5護衛艦隊の兼任て書いてありましたが」
「ただこれでカードの一つが直接動かせる事に概ねなったがまぁ大丈夫だろう」
「どんなお方なんですか」
「まぁ言える事はお金遣いが荒いかなと言うより防大在学中に一回だけ金の出会ったんだけどねまぁ何処から出てるの？と言う感想だったかな
　まぁ学科が同じであったからな、だが安全保障に関しては化け物だ、法から戦闘関連まで首席クラスだったからな、まあ法の面及び後方で力を出すタイプだからな」
「大体学科は想像付きました、ちなみに同期は？」
「北方北海道海上軍総監永井提督だ、まぁその人も先輩だ」
「ほーん」と豊川
「まぁこれで興味深い事を見させるとなりそうだ」
「すまんな、時間を取らせてしまい」

「いいですよ、別に」
「まぁこんな所かな」
と秋山は人事書類を見ていた
とその時電話がなった
豊川は退室した
「もしもし、秋山です」
『久しぶりです、砦海です、いつもお世話になってます、これ変だよね』
「まぁ確かに」と秋山は悩んだ
これについては後に語るとして
「そんなことより先輩就任おめでとう御座います」
『ありがと、今でも頭が痛いが、まぁなっちゃたもんだから、どうすればいいか』
「いいですよ別に、それよりどうしたんですか」
『就任の挨拶も兼ねた会議もしたいのですが』
「ですが？」
『なんか書類等がやばくてうん』
「こっちでなんとかするよ」
『ありがとうございます』

「いいよ別に」
『うんじゃぁ』
『じゃぁ』と秋山は電話を切った
　そして秋山は豊川を呼び今後に付いて話した
　２０３０戦記　第壱拾玖話　終

《日本国　国防省　会議室　７月２５日》
　今日は砦海提督の海幕の就任挨拶を兼ねた会議を行った
　敵はしばらく進行がないので短時間で終わった
「まさか砦海先輩が上司は未だに思いません」
「それはひどくない」と砦海
「いやお金の管理は大丈夫ですか」
「大丈夫ですから」
「うーん本当かな」と苦笑いする提督がいた
　彼女は髪を一つ結びにして眼鏡を掛けていた
「永井さんは、全く」秋山は苦笑いした
「まぁ確かにそうなんだが、こっちはロシアだったりの外交が忙しいからね」と永井は苦

笑しながら言った
「一応ロシアとは仲良くなっているとはいえなかなか気を抜けない相手だからな、特にクリミアと千島列島の撤退は驚いたよ」
「あれは予言でもしているのですかね今でもそう思いますけど」
「私もだなあ」
「当時は不思議だったからな、しかし直後に特殊類の侵略が始まったから各国は手こずったがロシアは手こずらなかった、どう評価すべきか今でも議論すべきだな」
「しかしそのロシアでも新たな主義が生まれてしまいこれを語りないと」
「気持ちは分かるがよせ秋山うちらは軍人なんだよ」
「そうだな」
「まぁ欧州は機能しているだけで奇跡だと思う」
「特殊類によるベルリン陥落を発端とした再編成、欧州は政権が崩壊していないだけで奇跡だが・・」
「実際集団的自衛権を常時発動している今、日本は派兵しているがこれはいつ持てるがわからない」
「そうだね、この前ロシアとの定期会合でモスクワが陥落すれば国内情勢は悪化の一手をたとると」

「ロシアは技術を高めている、それに対になるのは中国」
「中国は国家としては言えにくいまぁ現状わかっている特殊類の大ボスががいる限り国としての機能は難しい、それ以降の対応が追いつかなかった」
「今こうして台湾が陥落していないのはこちらのおかげなのかな」
「そんなことよりアメリカの方まだ回復はしていないのか」
「陸軍、海兵隊を中心とした国内進行危機を食い止めた代償がきついて太平洋軍総司令官が言ってたな」
「空母がいるて言う事が大きが数は少ない」
　両者はうなずいた
「うむさてと今の日本の状況は楽ではない」
「うん航空を主に制空権が確保だれているがこれがいつまでもつのか」
「そうだな先程話したとおりの状況だからな」
「海上はこちら側が抑えているが、ヒヤヒヤするものだあからな」
「それでも国内が平穏なのは安定した物流と物価流石だと言わないといけないと思いますね宇佐美総理には」
「ふん砦海さんのゆうとおりだ」
「それよりその海運の方から、二桁護衛隊の要請が」

「気にするな永井、こっちでなんとかするそろそろ時間かな」
「そうだな、また」
「またね、時雨ちゃんによろしく」と秋山は両者を見送った
そして会議室をあとにした
２０３０戦記　第弐拾壱話　終

第弐拾玖話＆参拾話　合併話

《日本国　舞鶴基地　岸壁　7月22日》

ある一隻の艦娘いや人がある艦船を待っていた

その子はソワソワしていた

それもそのはず親族を待っていたからで合った

そしてその船が見えてきた

そして一隻の船が見えてきた

きりしまだ

日本海の定期的滞在任務を終え舞鶴に補給休養をしにきたのであった

タグボートに押してもらっての接岸で合った

本来極力使用しないようにしているがここ数年はタグの使用頻度が高かった

それだけ船を酷使している証拠だ

桟橋がかけられゴミ出し等の所々の作業が終わり乗艦許可がおりてその子は乗った

「お兄ちゃんーーーーーーーーーーーーーー」とその子は言った

その人は頭を掻きながら

「やめてよ”清霜”いや慶子」
「だってお兄ちゃんが返答してなかったのが悪いんだも」
　その人は頭を掻いた
　そして奥から四人が出てきた
「まったく貴方は」とその男の妻は言った
「違うんだ汐里また妹が」
「ふふ」彼女は笑った長い髪は右目を隠し行動にきたすかのように
「ふふ、清霜貴方は全くの”怖いもの知らず”ですからね」と
「私は甘えたいの早霜」と抱きつきながら脚を動かす
「そうゆうのは慶子気おつけなそれで何を出くわすか分からんあと瀬早もな」
「分かりました真幸さん」
　清霜は気づいた
「朝霜は秋霜夫妻の見舞？」
「うんそうだね、横須賀出港直前に泊に合ったがいずも、直すのに3が月掛かるってまぁあれでよく廃艦にならなかった方だよ」
　そうこの前の海戦でいずもは敵の砲撃を受けて中枢が被害を受けて大穴が空いた
　幸い犠牲者がいなかったが何故という調査が進んでいるのとそれら関係の機器を直

すのに時間を要している
「これが艦船だったらすえ恐ろしい多分撃沈だ、が深海棲艦で良かった」
「まゆき」と早霜は怒る
「持論だぞ晴子これは」と真幸は頭を掻いた
「とはいえここの提督化け物過ぎだろ実質被害皆無てあれぜったい人間やめてる」
「うんもうここまで来ると運じゃないよね実際」
「そう過去の戦歴から見てもそうだ使える手はなんだって使うそれが本来の防衛戦なんだけどね」
「横須賀所属の艦船、艦娘を総出撃させてあの結果結構心残りだよ、慶子、なんかあるか？」
「一度青葉が探ろうとして失敗した戦果はゼロだよ」
「やはりないかまぁただ幹部学校の模擬戦歴が気になるな」
「それは言えてるね瀬早、普通は出るもんだが青葉はそこに探りは入れたのか」
「いいや出なかったらしいなんというか普通だったらしいが戦闘順位は高い方だと分かったよ」
「まあいいかなそんなことより慶子ここの生活はなれたかい」
「うんまぁ前任は嫌だったけど今は分からない優しいけど何か変貌するのかなと心の奥

底で嘆いているだよね」
「前任の件は通報で知っているただ自分は違うと思う何かをやり通すタイプだと思う故に前の戦いがそうだった」
と彼女達が話しているきりしまの食堂に歩き音が聞こえてきた
重たい音だった
「ここで作戦を立ててたな」と来た彼は言った
そして慶子達は敬礼した
彼も応答した
「何か不思議そうに警戒してるね」
「いいえ」と瀬早
「いいや僕に不満そうだな愚痴らないから言ってくれ」
と言い上官に上官に持つ懸念を言った
「いずもの件は聞いている概ね真幸さんの意見で間違いない確かに運とかのうんぬんより僕は被害を確実に最小限に抑えたい」
「だったら何でも使える手は使わせてもらう」と秋山は優しく注釈した
だが彼らにはまだ不安だった
「分かったよじゃあ一手お手合わせ願いたい予定がなかったらどうでしょうか」といき

なりだった
　彼らは驚いたが
「分かりましたお手合わせします」瀬早は意外な答えを返した
「ただしここにいる仲間もいいですか」
「いいでしょう」と秋山は返した
　その後模擬戦の詳細が詰めたのも自然の流れであった
　第弐拾玖話　終
　第参拾話
《日本国　舞鶴基地　模擬戦室　７月２２日》
　夜に入った頃
　長方形のタッチディスプレイ型の机が合った
　その前に秋山は座っていた
　この部屋は元は会議室だったが中谷政権下の”防衛改革”によって生まれた部屋で合った
　これは陸海空全ての基地に置かれ戦術を磨く目的で設置された
　これによって２つの危機は日本の”戦略勝利”の一つに与えたと一般的に言われている

話を戻し
秋山は秘書のモンタナを参謀役として連れた
ちなみにここ迄彼らは恋愛を発展させている
「まさか提督から模擬戦を誘ったのは意外でした」
「ははそうだろうなただこれも戦術の研究の一つだよ」秋山は返した
「他人を知り戦術に反映させるこれも進化の一つだよ」
「ええ分かったわあなたがこの前のやつでもわかったし」とモンタナは言った
とその時
「失礼します、瀬早以下４名入ります」と瀬早の声がした
「どうぞ」と彼は言った
「失礼します」と言う声が４回続いた
「さて早速だがルールの確認だ」
と言い秋山はルールの確認をした
「今回は島嶼防衛だ単にそれだけである補給線の圧迫は敗北とシステムは認めるからなでは始める」と言い始まった
ここでこの机について話す
手元にタブレットがあるがタッチも可能である

更にはＡＩが自動判定をするシステムであった
『演習を開始します』と言うシステムアナウスが流れた
双方沈黙が訪れた
ディスプレイには南から西にかけて揚陸不可が多い島北東に所属不明の２０を超える艦船が現れた
天候は曇りで暗く波は高かった
動いたのは瀬早だった
「ｕｓｖを展開かまぁ今回の島は中枢だからな」秋山は言い少ない弾数で撃破した
小さな声で
「これを見越してたか」
「うーんまさか前衛艦船しかわかんなかったか」
「ＤＤ×４ＦＦ×８で後方のｄｄ２，ｆｆ１の３隻は指揮艦かＣＧがいないことを見るとこれは気をつけろ既に仕掛けてる」
「ここは２コ護衛隊を遅滞戦闘を早霜は提言します」
「対潜哨戒も兼ねてＦＦＭを南西に配備したいただ数はそんなにいいかなただ念の為」
「分かったよ」と瀬早はｆｆｍ４隻南西に急行させ２コ護衛隊を敵艦隊に向かわせた
瀬早は護衛隊の対潜哨戒もコマンド指示をした

秋山側も小声で
「モンタナこれをどう見てる?」
「遅滞戦闘をしたいのは明白です、全体が分からない以上哨戒機を出すのは危険だと」
「そうかふん」と秋山は笑った
と彼はその後の対応をした
画面上には１４０を超す航空機があった
まるでチェスを指すような早技であった
無論瀬早は対空戦闘をした
９０機撃破して航空機は引き返した
(なんだよ航空優勢を取らないとかある意味無意味じゃん)
(うん待てよ) と瀬早は思いＵＡＶを出した
とその時
「旗艦ＤＤが大破!!」と言うのが声が響いた
それは海戦を決定づけた
旗艦が大破したらな指揮権の移動など混乱が生じる
要は痛いところだった
秋山はモンタナと相談して指示を送った

それは海戦が瀬早側が敗北を決定づけたその後だった
それは魚雷だった
しかも右上だった
指揮が混乱している中の不意打ちだった
それと同時に嫌なサインがあった
それは上陸してこない地点への上陸警報だった要は仕組まれていたのだ
「完璧だ」
「完敗だわ」
「知られたくはながったんだがね」
と瀬早、真幸、幸江
慶子、汐里はあ然としていた
「想定外の事というが戦争は甘くない」
「はぁわかっていたが」と瀬早は頭を掻いた
「まぁありがと、どうだ飯でも食うか」
「いいですか」と言い彼らは飯を食い半正解をした
２０３０戦記　第参拾話　終

第壱拾漆話

《日本国　三沢基地　４月２日　夕方》
「疲れた～～～」と知川霊寒は机に寝そべった状態で語った
「まぁそんなことだった？」と伊山峠（つられ）は笑いながら言った
「だって、今回はビビったんだよ、ザイとか出てきて、ここは、比較的安全地域だがらと、、、、」
「れいが言いたいのは分かる、主力は日本海面に即した地域だからな」
「まぁ、また報告書を部下達総出でやるんですか”お兄ちゃん”手伝って」
「やりますよ」とその時ノック音が聞こえた
「いいよ入って来て」
「失礼するよ」と声の主は入った
「な～に霊寒が兄に甘える所に入ったか」と発言の主は言った
　彼女はロングヘアで顔は細長くモデルだった
「そんな事はないよ、椎名ちゃん」
「はぁ、貴方も、妹に甘いんですから」と更には

「霊寒は僕たちの事も忘れたのか」と男性の声がしたその人は顔つきはイケメンでよく髪は若干長かった

知川霊寒は赤く染めた

「ちょっとそんなに言わないでよ貴方」と恥ずかしげに言った

「まぁ戦闘隊長の二人にも任せて起きなさいこの双川に」と言言った

「まぁ今は勤務中だが、僕たちの事も言えないからな」と知川兼久司令と

「まぁまぁいじるのはそこまでにしなさい貴方、れいちゃんが可愛そうだから」黒髪と赤髪が混じった女性はと言った

「紅葉おばさんありがとう」と霊寒は言った

「やれやれ」と悩みながらした

「まぁ今回は奇襲だった上ザイ、ネウロイに勝て事は大きい、しかしこの倍が存在したら、、、」

「うむなにかの予告？にしてはびにようだったしうーん」

「取り敢えずは今回の原因は試したかったのかと疑問が」と紅葉

「それが見方だろう、よし報告書はこれでいいでしょ」

「うむそうだな、部下にこれを伝えますか」と言って伝えた

「うーむなんというか警報があったらな」と霊寒は言った

「うむそうだな」と峠
「そうえば明日、お母さん達来るんだっけ」
「うんそうだけど、父は遅れるって、まぁまだ分かっていないらしいが」
「なら、予定通りだな」
　と兄妹が明日の予定を進めると
「えお義父様くるんですか」と椎名
「うん、この前言ったはずだけどな」
「うーん、じゃぁ、編隊飛行ですか」
「まぁそうゆうことになるね」
「分かりました」
「自分はその時参加しますので」と兼久
　皆はうなずいた
「うーんじゃぁ報告書上がるまで待つか」と峠は言い皆はそれを待った
　その間明日の事に付いて話した
　報告書が届いたのは午後7時過ぎてだった
　そして討論をした後に本部へ送られた
　第壱拾漆話　終

第壱拾捌話

《日本国　三沢基地　４月３日》

この日は晴天だった

まるで主を受け入れるかのように

そこにぽつんと一人の男性が立っていた

３０代で小柄だが、その人の階級は上から数えた方が早かった

そして、彼は、上空を見上げていた

７機の航空機がロールパスした

そのうち１機はＢ－１だった

彼は思うように見ていた

そして彼はある事を察したか駐機場から立ち去った

基地司令室

「伊山大将遠いところからお越しでありがとうございます」と霊寒は敬礼をした状態で聞いた

「硬い御世辞はあまり好きじゃないからね」とその男は言った

その人はカーキ色の迷彩を着ていた
「それより昨日の空戦は聞いた、確かに奇跡だが、舞鶴に連続してのは歩が悪すぎるが”アイツラ”は常識が狂っている想定外を意識したほうがいいと視察のはずがこんな事になるとは思わなかったうーむどうしたものか」
「全てに警戒をしなきゃいけないのは分かっています」
「うむそれで良い、それよりここの我が航空隊とよくやっているか」
「はい、空戦を受け持っているのは頭が上がりません」
「うむ、三沢航空隊から催促のような増援要請がきている、どうすれば良いものか」と悩んでいた
「沖縄の部隊は動かせない、となると本土なのは分かっている事だが」
「そこは私がなんとかする伊山司令はいつも通りに」と伊山の隣に居た女性は言った
「わかったよ霊夢さんの言うとおりにしよう」
「うむまぁここ最近の活動について説明を頼む」
「はい」と兼久が言った
昨日の攻撃以外はいつも通りの任務だった
「分かった、ご苦労、今の状態を聞いた」
「レクス中将、入ります」と言う副官の声がした

「入る」と英語で言い入って敬礼をした
「レクス中将、座ってくれ、増援の件は持ち帰って検討するいいな」
「はい」と言った
「レクス中将からも説明を頼む」と言い先ほどと同じく説明を受けた
「他に要請は」
「今回の空戦で弾薬が底を付きそうでしたのでつい先程事務関係に通達しました」
「分かった」と彼はうなずいた
「以上かい、なかったら帰る」と言い諸所の視察を終え伊山大将は去った

伊山峠宅

「父さん、体大丈夫ですか?」と峠
「うんまぁこんな遠征はなれてるから大丈夫」と父は語った
「まぁ峠の言うとおりだよ貴方」と妻は言った
「霊夢、、、」と父は顔を隠した
「全くパパは計画予想が甘いんだから」と霊寒
「まぁ休ませてもらいたい」と父
「まぁ平一さんは甘いから」と兼久

閑話休題

そう伊山大将は結婚していた

相手は博麗霊夢だったがその慣れゆきなどはまたいつか

しかも、、、、

「しかし、この家族関係も言えないからな」

「あぁそうだなてゆうかやめてくれ」

「うう」と夫婦は顔をそらした

「まぁ私はそうゆうのはどうでもいいですか」

「それより君たちはここ最近どうなんだふたりとも」

「ええ旦那ともに仲良くやってるよ」

「はい父上」

「まぁいいさ、さ飯を食おう」

と言い彼らは飯を食べた

２０３０戦記　第壱拾捌話　終